

前の車から手が出てい
る。その先からうっすらと
煙が流れていく。信号が青
になり、その手の先にあっ
たものが路面に落ちた。火
の粉が飛び、それは道路の
わきに転がっていった。

踏切で電車の通過を待
つ。電車が通りすぎ、遮断機
が上がりうっすらといる時、
前の車の運転席のドアが開
いた。やはりそこから手が
出てきて、空き缶を「丁寧
にもドアの下に直立させて
走り去った。

モラルの欠如と言ってし
まえば話は終わりだが、そ

秩序を支える「公平な観察者」

答えにはならない。なぜタ
メなのかを示されないから
である。「禁止」の文言に
頼らず、遠回りで時間はか
かるが、ひとつひとつの
「なぜ？」と真剣に向き合
い考え抜くことが必要であ
る。モラルの根源は、自身
のうちにこそある。

以前、このオーブンカレ
ッジでアダム・スミスの
『道徳感情論』（1759
年）に「自由」の社会的意
味を探ったが、タイトル通
りその基礎には、モラルへ
の問いがある。

他者の行為や感情を観察
し想像する際、他者の立場
に立つてその妥当性を判断
する能力をスミスは「同感
」という。こうした「同感」
の経験を蓄積する一方で、

者との切断しえぬ現実的関
係が社会にはつねに存在す
ることである。われわれは、
無縁の他者に対してさえ何
らかの判断をするものであ
る。新聞紙上の他者にも、そ
して路上を行き交う見知ら
ぬ他者にも。逆にいえば、わ
れわれは社会の中で、他者
による無数の判断に晒され
ながら、日々を過ごしてい
るということでもある。

「判断される」ことへの想
像力が失われ、他者の「同感」
が問題にならなくなれば、自
由の意味をはき違えた勝手
気ままな振る舞いが横行す
ることになるだろう。そのよ
うな社会に未来はない。法や
制度の存在理由は「ここに
ある。諸個人が「公平な観察者」
の内なる声を等閑（とうか
ん）に付すようになるにつ
れ、それらの束縛はより強力
になるだろう。ポイ捨ては確
実に当人の首を絞めている
のである。細かな規制と罰則
とがいたる所に存在する社
会が、はたして望ましいもの
であろうか。

モラルはどこにあるのか

そもそもモラルとはいったい
何であり、それはどこにあ
るのか。

なぜポイ捨てはいけない
のか。常識だというのは



名古屋経済大学
経済学部准教授

大塚 雄太

社会において自身もまた他
者の判断を受ける存在であ
ることを知る時、自身の行
為の規準は、見知らぬ他者
が自身に下すであろう冷静
な判断を想像する力によっ
て導かれる。他者との交際
を積み重ねて人は、利害関
係のない他者、すなわち
「公平な観察者」から「同
感」されうるかどうかを他
でもなく自己に問いかけな
がら、利己心を冷却し、行
為を妥当な範囲に収めよう
とするようになる。

重要なのは「判断し、判
断される」という自己と他

さて、近い将来、小・中
学校に「特別の教科」とし
て道徳科が導入される。
「考え、議論する道徳」。
それにしては学習指導要領
の記述は思いのほか細か
く、私など肩身が狭くなる
思いがした。作り手側にも
さだめし葛藤があったこと
だろう。教育が重要な役割
を負っていることは確かだ
が、まず襟を正すべきは、
日常的にこの社会に疑惑や
不正という言葉を飛び交わ
せている私たち大人の方で
はないのか。

おおつか ゆうた 社会思想史
・経済学史。名古屋大学大学院経
済学研究科博士後期課程修了。博
士（経済学）。名古屋大学経済学
研究科、同高等研究院を経て現職。
1982年生まれ。

